

ドイツ文学わき道散歩(7)

誰が白雪姫に毒リンゴを食べさせたのかご存知だろうか。数年来の童話研究ブームで出版された多くの本にも答えが載っている。言うまでもなく、『白雪姫』はグリム兄弟の童話集『子どもと家庭のメルヒェン』に収録されている話で、“グリム童話”の代表格として知られている。

言語学にも通じたグリム兄弟は、各地の民話や神話、伝承を研究し、童話集のほかドイツ語辞典の編纂にも力を注いだ。実はこの時期はドイツ文学のなかでも他に類を見ない童話の宝庫である。

ヨーロッパ中を革命の風が吹き荒れた1700年代後半から、ドイツ文学にも嵐のように熱狂的な文学革命運動が興った。シュトゥルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)と呼ばれる時代の到来、そこから抜け出した古典主義とロマン主義の時代。ドイツ文学黄金期である。哲学者ヘルダーの「民族性を重視すべき」という提唱にゲーテが賛同したこの時期には民話や伝説に目が向けられ、グリム兄弟のほかにもブレンターノ、アルニム、ティーク、ハウフなどが今なお愛される童話を残している。

さて、冒頭の質問の答えはいかに?グリム童話初版によると、それは白雪姫の実母の王妃である。実の娘の美貌に嫉妬した母が、娘の死を願う。最後には王子と結ばれる白雪姫は、結婚式で実の母が真っ赤に焼かれた鉄の靴で死ぬまで踊る様を見届ける。さすがに2版以降は実母が継母に変わっているが、なんともはや、といった感じである。勿論全てのメルヒェンがこのような調子ではない。毒々しさのない大人のためのメルヒェンも書いたH. ヘッセは、ドイツに永らく影を落とした暗黒時代を乗り越えてノーベル文学賞を受賞した作家なのだが、これはまた、別のお話。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり

フォーラム実行委員会報告

フォーラムは、平成12年度にはオランダウィークの一環として、9号館4階の会議室にて「オランダの若人はいま! 日蘭文化交流の将来」というテーマで、また平成13年度に「日本におけるイタリア2001年」を記念しての本学図書館の催し物の1つとして、同じ時期に開催されている稀覯書展示会の最終日に、稀覯書展示会場であります国際交流会館6階のユニバーシティギャラリーにて「イタリアに魅せられた理由」と題してそれぞれ行ってきました。

こうした経緯の中、今年度は学園祭協賛という形で学園祭開催期間中の11月1日(土)に図書館の第2閲覧室で「私の見た図書館」として主に現在、また過去に図書館で非常勤として仕事をして頂いた9人の学生の皆さんに、図書館での仕事の経験を通して何を学んだか、また有効な図書館の利用法等を発表してもらいました。フォーラムに来て頂いた学生の皆さんがこの発表を聞いてこれから図書館を使う上で役立てて下されば幸いです。

今後もしもできれば、学園祭協賛という形で学園祭開催期間中に行うことを考えています。

フォーラム実行委員会委員長 栄 咲子